



『多くの学生と共に体験したいフィールドスタディ』

私は、2024 年夏、ラオスに行った際に虫に刺され、蜂窩織炎を発症しました。最初は痒みだけでしたが徐々に熱を帯び始め腫れがひどくなり、象のような足になっていきました。滞在 7 日目、現地の医療機関を受診することになり不安もありましたが、現地の医師、看護師、通訳の方、付き添っていただいた秦野先生のおかげで無事に治療を受けることができました。特に印象的だったのは診察時の“多段階通訳“でした。医師がベトナム語で話し、看護師がラオ語に訳し、通訳の方が英語に変換し、秦野先生が日本語に直して私に伝わる、私の返答を逆の順番で返すと言う流れを体験し、不安と同時に「自分のためにこれだけの方が動いてくれている」という安心感もありました。



↑右足：蜂窩織炎

治療中には日本の看護や施設と比較して戸惑う場面も多々ありましたが、ラオスの看護制度を現地で学んだこともあり、実際に看護に触れることができ良い経験になりました。

その後、日程の都合によりラオスで一晩入院し、タイの病院へ移動し約 3 日間入院することになりました。治療があるためプログラムの一部に参加ができず落ち込んでいましたが、先生方の励ましもあり、「これは自分にしかできない体験だ」と前向きに捉えることができました。タイでは看護師の方が英語で話しかけてくださり、自分 1 人でも意思疎通ができることに安心感を覚えました。また、タイの姉妹校の学生（バディ）が病室にお見舞いに来てくれ、タイと日本の看護で共通する点やどのような看護制度なのかを話す機会がありました。バディが話してくれた実習に行く時の緊張の話に共感し、将来はどこの科に行きたいのか、その理由をお互いに聞き同じ目標を持つ人と出会い刺激を受けました。また、タイでは 1 年に 3 回国家試験が行われることや看護師免許を 5 年に 1 回更新する必要があることを初めて知りました。それまで異国の看護について深く触れたことがなかった私にとって、現地の学生との交流は有意義な時間であり、貴重な学びとなりました。



↑バディと先生方と記念写真

帰国後一年が経過し、フィールドスタディでの学びと経験は実習でとても役に立ちました。患者として不安を抱えた状態で医療を受けたことで、患者さんの気持ちを理解し寄り添える看護師になりたいと強く思いました。患者さんの言動や表情、沈黙に着目し言語以外のコミュニケーションの重要性を実感しました。

フィールドスタディは計画通りに進まないこともあります。でも、だからこそ得られる気づきや出会いがあると実感しました。予期せぬ出来事や大変なことも見方を変えれば“自分だけの学び“に変わります。これからも未知の環境や新しい価値観に出会うことを恐れない好奇心と、一歩踏み出す勇気を大切にしていきたいです。

(4 年 正木杏奈)

←無事に退院できました！



聖マリア学院大学では、多くの国際交流の機会があります。毎年、7 月と 1 月には韓国の姉妹校の方々が来学されますし、聖マリア病院が行う JICA（国際協力機構）の研修員との交流などもあります。